

四 矢鱈聞き、聞き過ぎ

さりとして餘に耳が長く、無暗矢鱈に聞き過ぎてても、食過と同じで困つて了ふ。彼處のお稻荷様は效驗がある。オイソラ一寸參らうか。彼處の藥師様は靈驗があらたかな。オイソラ參らねばなるまい。何處の何誰が云何、此處のこなたが恚うと、そればかり追廻しては、結局自分には何物をも得ることが出来なくなる。

宗教利用論者は、同時に併用論者になり易い。人動もすれば云ふ。佛教もよい、耶穌教もよい、儒教も結構である。神道も大切である。回々教も天理教も何も彼も、どの宗教も、皆有益の宗教である。されど夫々皆善くない所もある。夫故、自分は其の多くの宗教の短所を除けて、長所のみを取用ひやうと思ふ。唯一の信仰に憑らねばならぬなど云ふのは、全く頑固の思想である。然り言は殊に美を盡して居らうが、事は全く崩れて居る。そんな宗教は、そこら中から寄集めの材料を以て繼ぎ合せた、血の通はぬ不具にされた死骸に過ぎぬ。そんな者が何にならう。却て自ら損し他を害ふばかりである。

私の宗教は、私が唯一個であるだけに、唯一つでよい。私が宗教を信ずるのは、その唯一の宗教が有難いからである。偏にこの私のために御骨折下さるゝ、如來の御親切がやるせなく、慈悲が切なさに信ぜずに、居られぬからである。任せずに居られぬからである。信じ任すのは、其の時の都合でもなく、驅引でもなく、間に合せでもなく、誤魔化しでもない。全く如來の眞實に動かされたのである。固より國のためでもなければ、家のためでもなく、成功のためでもなく、名利のためでもないが、信ぜられ任せられてみれば、同時に自ら一切のためになつて下さる。此の場合に於ても、頗る謹嚴の態度を以て、廣く聞かず深く聞け、徒に道行に迷はされずその堂奥を

衝け。

近くの町へ驢馬を賣らうと、空馬牽いて出かけた親子連れ。間もなく小學校歸りの小供の一隊に出逢った。饒舌つたり笑つたりしてゐる中の一人が大聲で「オヤマあ、彼の人達を見よ。空馬をひいて歩く。どちらか一人乗つたら好ささうなもの。變な事をするネ」と云つて通り過ぎた。由來耳早の氣早の親爺。早速に息子を乗せ、自分はさも嬉しさうに歩んで行く。すると間もなく、何かひそく話をしながらやつて来る、一群の老人に行逢つた。一人が連の者に向つて「ソラあの通り。私が今言つた事の證據はあれです。今日は文明とかで、老人が敬はれる處か、何時も凹まされてゐます。あれを御覽なさい。年寄が歩いて若い者が乗つて居る。何といふ不埒な奴でせう」と云ひながら、息子を睨みつけて「降りよ不幸者、親の足を休めぬか」と、さも憎さげに云ひ捨て、通り過ぎ、「親虐め、親泣かせ、あれで平生も思ひやられる」などの聲も續いて聞えた。「成程これでは息子の爲にならぬ」と思つた親父殿。息子を降ろして自分が代つて乗つて行く。暫くすると、今度は何だかよく饒舌る子連れの女共が向ふからやつて来て、通り違ひに口を揃へて云つた。「オヤ何と云ふ酷いお爺さんでせう。自分一人好い氣になつて乗つてゐる癖に、まだ年も行かぬ子供を歩かせて、可愛想に。一緒に乗せてやればよいに……」。

それも左様だと思つた親父どのは、息子を尻馬に乗せて町の近くまで來ると、半分は冷かして一人の町人。「お爺さん、その驢馬はお前のかへ。」「はい左様です。」「ほんまかへ、餘り酷いぢやないか。人は自分の驢馬なら、そんな酷い事はせぬ筈だから、私は屹度借物だらうと思つたよ。二人で乗る代りに、何故驢馬を擔いでやらないの」。折角自分の驢馬、借物と見られては大

變、賣物に瑕がつく。「へいそんならあなたの仰しやる通りにしませう」。二人は共に降りて、驢馬の四足を一つに引ツ縛り、棒を通し親子がウソく擔いで、汗水流し町の入口の橋の中程まで来た。處が何物かと大勢の見物人が集まつて、囃立て、大聲に笑ふ。笑はれる二人よりも、吊り下げられた驢馬が驚愕して騒ぎ出し、どたばたしたものだから堪らない。繩は切れ棒は折れて、驢馬はざんぶと河の中へ轉げ落ち、グツと一息に死んで了つた。途方に暮れた親子、間拔顔して「何だ馬鹿々々しい。骨折損の草臥儲か。お負に折角の驢馬まで臺なしにして了つた」。

「仰ぎ願はくは一切の行者等。一心に唯佛語を信じて、身命を顧ず、決定して行によりて、佛の捨てしめたまふ者は即ち捨て、佛の行ぜしめたまふ者は即ち行じ、佛の去かしたまふ處は即ち去く。是を佛教に隨順し、佛意に隨順すと名づく。是を佛願に隨順すと名づく。是を眞の佛弟子と名づく。」「我れ是利を見るが故に是語を説く」と仰せらるゝ、佛の語を信ずる。これが私の忘れてならぬ聞法の態度である。四重の破人が何であらう。異學異見の説が何であらう。別解別行人の聲が何であらう。「九十五種世をけがす、唯佛一道きよくまます」。我は唯お淨土に待つてござる阿彌陀如來の仰せを聞くばかり、信ずるばかり。世の喧騒に惑はされてはならぬ。世の人込に誤魔化されてはならぬ。比喻因縁だけを聞いて合法を忘れてはならぬ。「誠に佛恩の甚重なるを念じて、人倫の悞言をはぢず」。茲に滾々として大法の泉は湧き來るではありませぬか。

世の中は或點まで悟りが好いと云ふ風でなくてはならぬ。早呑み込の早合點では困るが、所謂機敏に物事を見て取らねば、人に後れを取る。そこになると「世尊拈華迦葉微笑」と云つた風に、禪宗の人は流石に悟りがよい。白隠

禪師などは、向ふの山に煙が見える、火があるなど悟る位では鈍い。直に摺鉢があるなど位に、いかねばならぬと申された。例の蜷川親當が悍馬に鞭打つて、京都から南へ向けて疾走して行く。向き合ひに歸つて来た一休和尚出逢頭に「何處へ行く」と聲をかけた。答へる暇もあらばこそ、馬の走るに任せ遂に行過ぎ、ぱつと扇廣げて高く差上げた。と同時に禪師は聲を勵まして「字が違ふ」と叫ばれたその機敏なこと。解りましたか。扇を揚げたのは鳥羽へ行くと知らせたのだ。扇は戸と羽と二字合せたのだから、開けばトバと讀める。處で本眞のトバ村は、戸の羽でなく鳥の羽と書くから、禪師は字が違ふぞと云はれた。

眞宗の人も機敏でなければならぬ。悟が鈍くては困る。地獄と聞いては笑ひ出し、極樂と云うても「そんな處へ誰が參るのかへ」棺桶を見ても「こんな桶に何を入れるのかへ」ではならぬ。南無阿彌陀佛と聞いたら、あははや我往生は成就しにけりと合點するがよい。私が迷うてゐるのは、助けて呉れとの事かと、悟りよくも承知して下された如來様が、開いて下された往生の道かと、悟りよくもお受けして。助くるぞの聲をハイと受け込んで、字が違ふぢやない約束が違ひます。火の坑へ落つる奴が極樂とは、仕合者でございますと喜ぶのである。たゞくよき人の仰せを聞きて、信ずるばかりであります。